巻頭言 路

『不適切保育』『丁寧な保育』

理事　曽木 書代

今、世間で話題になっている『不適切保育』ですが、デリケートな部分もあり、文章にするには難しいところもありますが、園運営を、そして保育をする上で、とても大事なことですので、率直に私が感じていることを書かせていただきます。

園運営側としては、けがを止めた動作や見守りの一場面だけを切り取って『不適切』と誤解されてしまうなど、懸念する要素がたくさんあり、皆さまも危惧されているのではないかと思います。また、保護者や世間の方に必要以上に評価の対象とされ、見られているのではと疑心暗鬼になって萎縮し、モチベーションが低下することも懸念事項の一つです。

しかし、全国的に確かに、不適切保育と言われてもおかしくない園もあるのも事実です。中途採用者面接時に、「以前の園を『不適切保育』に耐えきれなくなって辞めた」という話を複数聞いてびっくりしたことがあります。

最近、この件でどういうわけか研修や会議等関わる機会をいただくことが増えてきました。その中で、私たちの園も他人事にしてはいけないと、より職員と考え話し合っていく年にしようと思いました。

早速園で、『子どもの人権について』、『丁寧な保育とは？』を、職員皆で研修や職員会議で改めて話し合いました。また、当協会の青年委員会研修でお世話になりました、『叱る依存が止まらない』の著者、村中直人先生を法人全体での研修にお呼びし、「子どもを叱る」とはどういう状態なのか、科学的にかつ分かりやすく紐解いていただき、考えるきっかけになりました。

しかし、研修だけでは不完全に思いますし、子どもが好きで、『好き』を職業にしている人が多い保育士が、なぜ『不適切保育』を行ってしまうのか、そこには何があるのか、私たち園運営側は何に気をつけなければいけないのか、考えているところです。

よく世間で言われる大きな原因として、低賃金、配置基準、活動のカリキュラムの増加、感染症対策などで保育士にゆとりがなくなっていることの他に、養成校では虐待は主に家庭で発生するものとし、保育士として自分がしてしまいそうなときの対応は学んでおらず、それも原因なのではと言われています。

保育士の悩みはほぼ人間関係といっても過言ではなく、負担やトラブルの多発等と、苛立ち、怒りなどの感情が相乗効果になり、よりひどくなることがあります。また、『子どもをしっかり躾なくてはいけない』という思い込みで、責任感の高い人が陥りやすいともいわれています。また、先輩や園の風土に沿って、不適切保育だと気づいていないケースや、人の価値観に口出ししづらく言えないなどもあるのかもしれません。伝えあえる風土や自分の保育を俯瞰的に見ることの大事さを感じます。

こういったことを防ぐためには、しっかりした職場の組織作りが大事であり、マネジメントをどう考えるかがカギになるように思います。その要は園長ですが、一人で何かできる力には限界があるため、園長を支えるしくみづくりが必要です。そのため、リーダー層の職務権限や育成、話し合いの充実が大事であると思います。玉川大学の大豆生田先生の著書『リスペクト型マネジメント』の中でも書かせていただきましたが、リーダー層と、法人の保育理念や価値観のすり合わせ、共有が特に大事であり、何度も繰り返しその時間を作ることの重要性を感じています。

また、それ以外にも、研修や園風土の醸成、保育環境の見直しなど、より俯瞰的に保育を見るしくみづくり、保護者への情報発信など、まだまだ気をつけなければならないところが園運営側にあると思います。

全部は書ききれませんが、どこの園でも起こる可能性が潜んでいる『不適切保育』です。自分ごとと捉え真摯に考えていくこと、また、『不適切な保育』にばかりにフォーカスするのではなく、『質の高い保育とは？丁寧な保育とは？』にフォーカスし、一生懸命考えていくことが大事ではないかと考えております。今年度もどうぞよろしくお願いいたします。